026-Te147z
1200901319512
026
Te147z
II

ﾄﾄ4B53
12 7
026.
Te147 3
II

善本寫眞集二十五

古寫經

天理圖書館

026
To 1473
II
40.11.29
寄贈
富永牧太殿
681115

目次

一 三藏法師玄奘取經像（唐、敦煌）
二 大智度論（隋、敦煌）
三 維摩詰經（唐、敦煌）
四 般若波羅蜜多心經注（唐、敦煌）
五 大方等大集月藏經（唐、敦煌）
六 寫經所文書（奈良朝）
イ 經生試字
ロ 經師手實
ハ 經所食口解案
七 大般若波羅蜜多經（奈良朝、養老五）
八 大般若波羅蜜多經（奈良朝、天平二）
九 大智度論（奈良朝、天平六）
一〇 小品般若經（奈良朝、天平十二）
一一 瑜伽師地論（奈良朝、天平十六）
一二 南海寄歸內法傳（奈良朝）
一三 大般若波羅蜜多經（奈良朝）
一四 瑜伽師地論（奈良朝、寶龜十）
裏表紙 大方廣佛華嚴經（奈良朝）

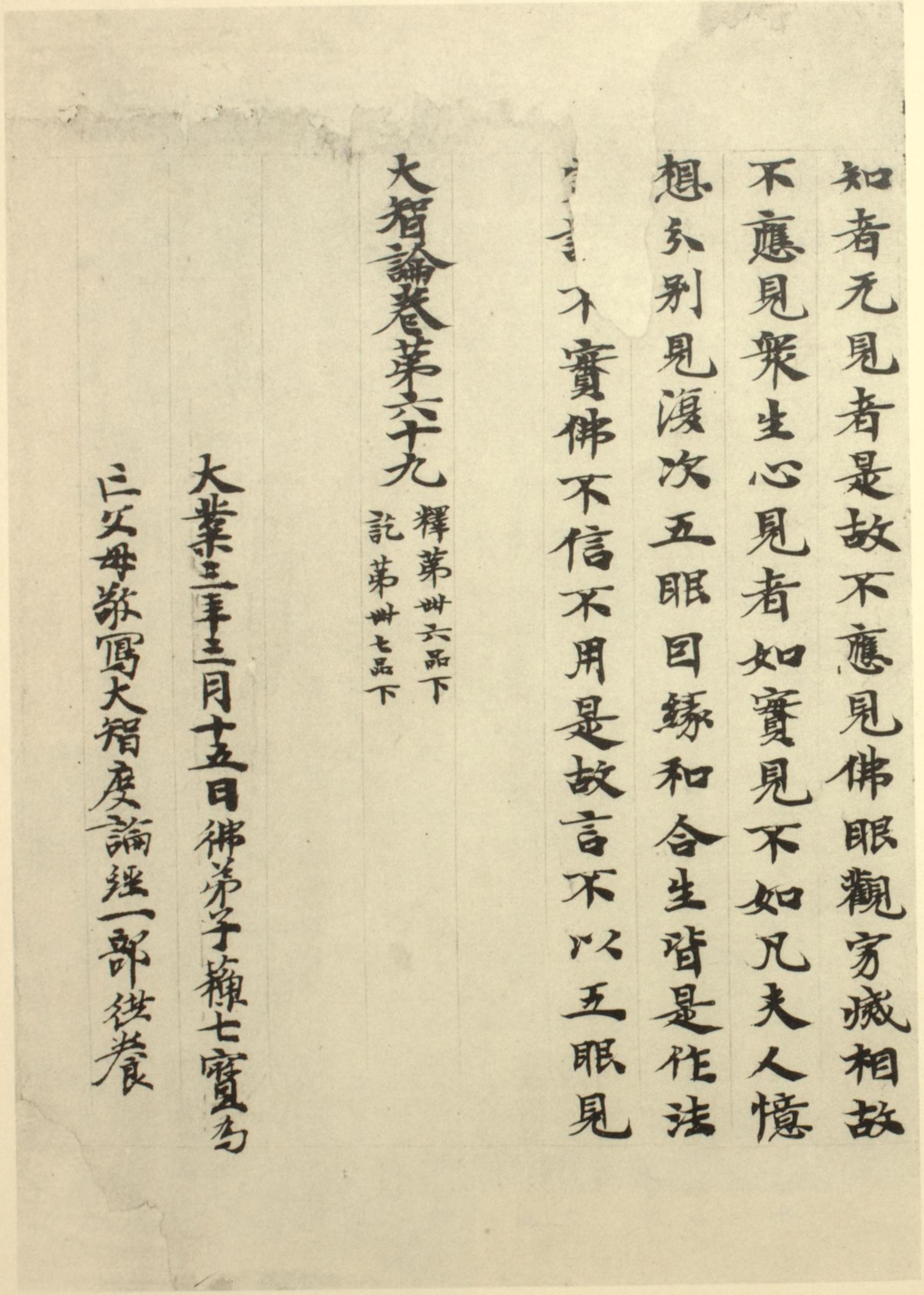
敦煌資料及び寫經所文書と奈良朝時代書寫經、以上の三項目にわたり、館藏のうちから十七種二十二點を選んで、善本寫眞集二十五に充てた。わが國往古に於ける聖經寫成について、機構は寫經所文書によつてその一斑を窺ふべく、敦煌の遺經を通じて源流は辿り得られると考へたからである。

なほ、わが國古寫經の平安朝以降に關して、は追つて稿が續がれることであらう。

一 三藏法師玄奘取經像

敦煌畫。紙本、彩色。四周纔に裁斷がみられ、現縱四十三糎、横二十八糎。圖像の樣式、或は寶勝如來佛とある文字の風に照らして、作は概ね唐代末以降か。描線粗剛にして賦彩密ならず、素樸簡勁の畫致は、西域邊彊の氣趣を十分に漂はせてゐる。始め大谷探檢隊の將來といひ、後ウォーナー博士（Langdan Warner）によつて米國に移出されてゐたものである。

玄奘は中國隋末唐初の人（六〇〇—六六〇）、傳は先づ藏經中の慈恩寺三藏法師傳に詳しく、唐太宗貞觀元年（六二七）印度に渡り、多くの佛像や經典を携へて同十九年歸朝、以後譯經に精進し、梵本翻譯の數は七十部一千三百三十八卷に達するといふ。渡天求法の行歷は彼自らの大唐西域記に盡くされてはゐるが、遜悟空等が活躍するむしろ後代の俗本西遊記等を通じて親しみは殊に深く、博く民庶に愛されたこの法師の姿は、宋人の平話大唐三藏取經詩話の早く語り傳へるところであつた。勝寶如來は五智如來の一つで、唐朝末、不空三藏の眞言密教の流布盛行によつて普及したものであるが、三藏玄奘との關係は明らかではなく、或は玄奘の智慧學解がこの如來佛によるといふのであらうか。笈に聖經を負ひ、拂子を手にするかうした畫像は、敦煌畫に他に例もあつて、もと西藏十六羅漢の一人達磨多羅像に由來するとも謂はれてゐるが、思ふに、取經僧三藏法師にまつはる話說成立に相まつて、この頃には玄奘像に轉訛、一つの型にまで生長し、既に固定してゐたものであるらしい。

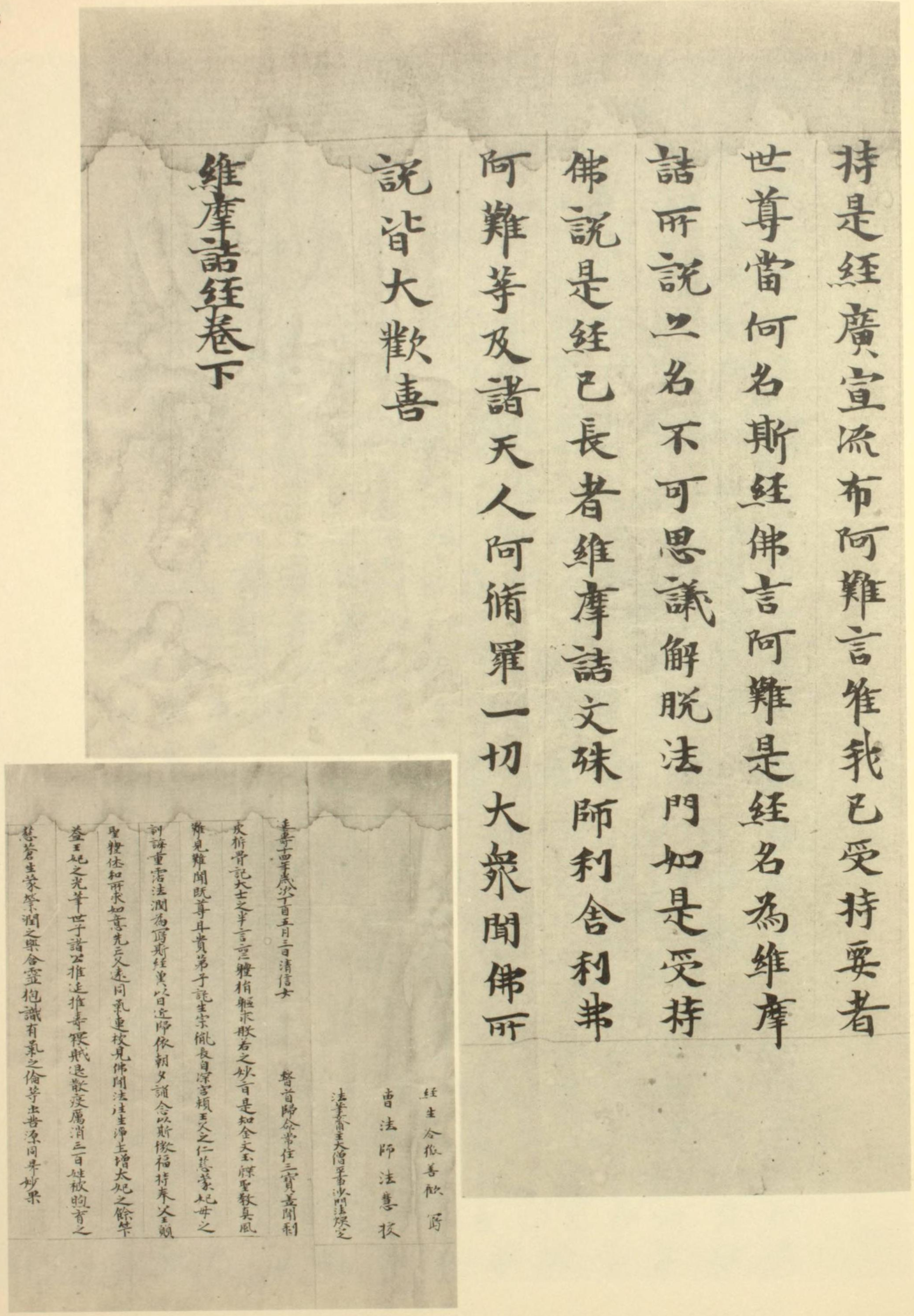


二 大智度論

敦煌經。龍樹菩薩造、姚秦鳩摩羅什譯。一部百巻、摩訶般若波羅蜜多經の論釋である。掲出は巻第六十九、巻子本一巻。巻首闕、蜜乃至正憶念當知是爲魔事聽法者於六よりあり、存十九紙、一紙縦二十五糎、横五十二糎、墨界高十九・二糎、幅一・七糎、二十八行、十七字。黄麻紙。尾題には大智論とある。

奥書　大業三年三月十五日、佛弟子蘇七寶、爲／亡父母、敬寫大智度論經一部、供養

大業三年は隋煬帝三年（六〇七）、願文によれば、蘇七寶なるものが、亡親のために本經一部百巻を敬寫したとある。所謂供養經で、これに一具の僚巻は他に數巻が傳存し、いづれも同様の奥書願文を具へてゐるが、願文と本文それぞれ書風を異にし、本經書寫の年次に疑を存する論者もある。但し、筆法は警拔にして剛直、多少の隷意を留め、隋人の法度がみられるといふものである。本朝時に推古天皇十五年、この頃の書蹟としては上宮聖德太子の三經義疏があつて、然も本巻より些か古體を存し、いまこの兩者の比較は、海彼書風の傳播について興味ある問題を提起するであらう。


持是經廣宣流布阿難言唯我已受持要者
世尊當何名斯經佛言阿難是經名為維摩
詰所說又名不可思議解脫法門如是受持
佛說是經已長者維摩詰文殊師利舍利弗
阿難等及諸天人阿脩羅一切大衆聞佛所
說皆大歡喜
維摩詰經卷下

三 維摩詰經

敦煌經。姚秦三藏鳩摩羅什譯。一部三卷。掲出は卷下、卷子本一卷。卷首闕、坐食汝往到彼如我辭曰維摩詰稽首よりあり、存二十一紙、一紙縱二十七・五糎、横四十六糎、墨界高二十・四糎、幅一・九糎、二十二行、十七字。茶麻紙。

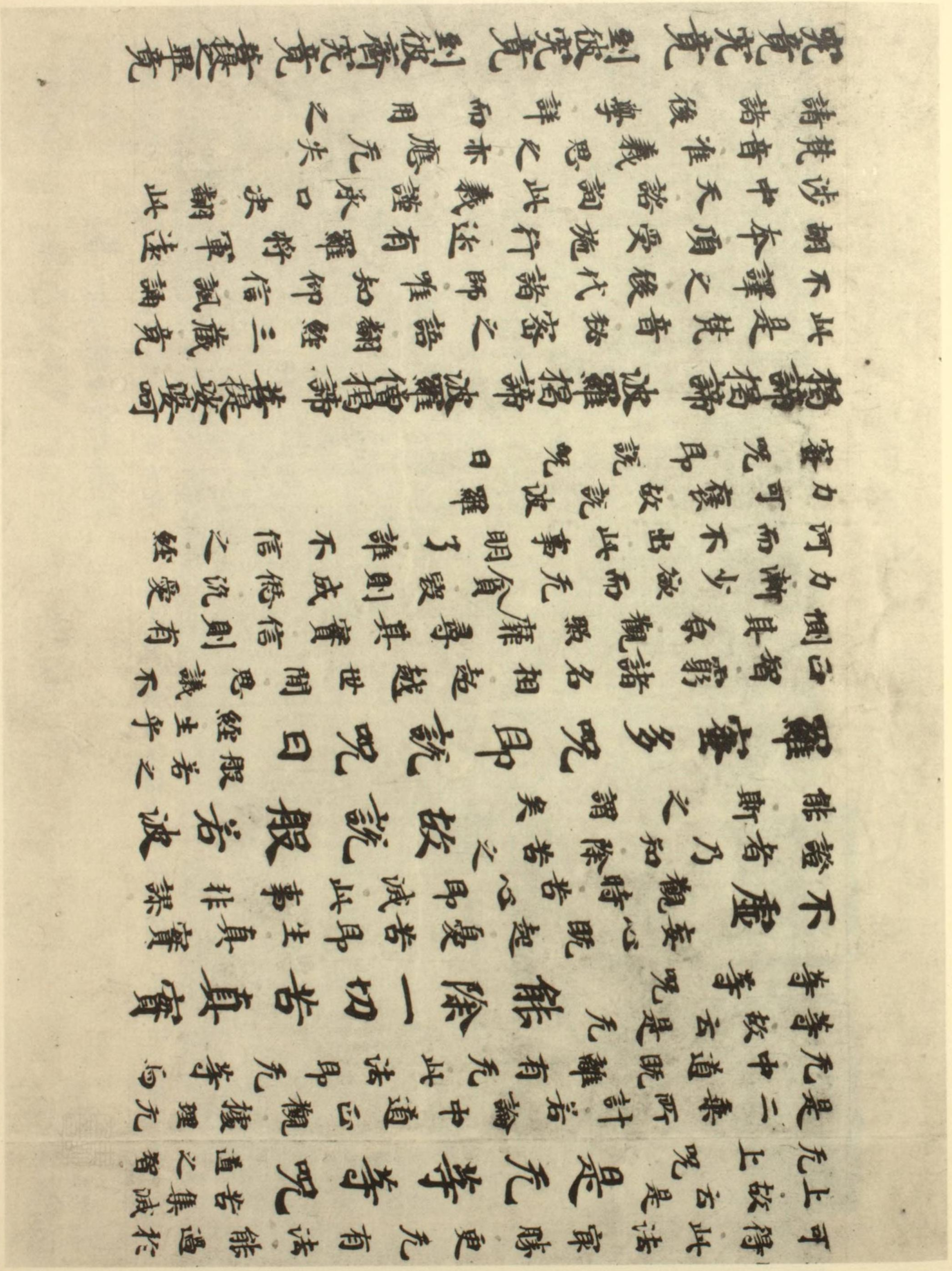
奥書　經生令狐善願寫／曹法師法慧校／法華齋主大僧平事沙門法煥定／延壽十四年歳次丁酉五月三日、淸信女　稽首、歸命常住三寶、蓋聞、剝／皮拆骨、記大士之半言、芒體捐軀、求般若之妙旨、是知、金文玉牒、聖教眞風／難見難聞、旣尊且貴、弟子託生宗胤、長自深宮、賴王父之仁慈、蒙妃母之／訓誨、重霑法潤、爲寫斯經、冀以、日近歸依、朝夕誦念、以斯微福、持奉父王、願／聖體休和、所求如意、先亡久遠、同氣連枝、見佛聞法、往生淨土、增太妃之餘算／益王妃之光華、世子諸公惟延惟壽、寇賊退散、疫厲消亡、百姓被煦育之／慈、蒼生蒙榮潤之樂、含靈抱識有氣之倫、等出苦源、同昇妙果

奥跋年紀の延壽は西域高昌國（唐西州、所謂吐魯番（トルファン））漢人麴氏の年號で、その十四年は唐太宗貞觀十一年（六三七）に當り、時に王は文泰、渡印に際して玄奘と親交のあつた人である。願主淸信女は文泰の公主にして、願文記名の下の空白はその自署のためである。本卷に同一願文を有する敦煌維摩詰經卷下は他にスタイン本あり、更に大谷探檢隊はこの經跋斷片を吐峪溝に發見してゐる。書法、結體縱長にして楷好、初唐の風韻をみるに足る。

四　般若波羅蜜多心經注

敦煌經。撰者佚名。卷子本一卷。卷首闕、存十一紙、一紙縱二十六・一糎、横四十三糎、墨界天地のみ、高十九・七糎、十八行、約十字、注細字雙行。茶褐麻紙。

唐太宗貞觀二十三年（六四九）に玄奘が譯した般若心經の注釋書であるが、撰者は不明。本書について從來全く所見はなく佚存書、且つ天壤間の孤本である。經末の呪揭諦揭諦　波羅揭諦　波羅僧揭諦　菩提娑婆呵に注して、嘗て翻經僧三藏は音譯するのみにて敢へて取義せず、後代は胡音に從つて諷誦するばかりであつたが、近時羅將軍が中天竺に涉り、口決を承け、その梵音を究竟究竟　到彼究竟　到彼齊究竟　菩提之畢竟と譯したとある。羅將軍は羅好心、中唐德宗時の人である。本卷の書成は從つてそれ以後であるとしても、書法圓勁秀厚、未だ殆ど盛唐の氣を失つてゐない。末尾には淸末諸學者の識跋を多く附してゐるが、うち、道光七年（一八二七）李宗瀚の文章によれば、もと敦煌塔中に得たものといふ。即ち英人スタイン等の石室發見に先立つこと數十年、とすれば敦煌の學に新たな一石を投ずること確かである。



五 大方等大集月藏經

敦煌經。高齊天竺三藏那連提耶舍譯。一部十卷。揭出は諸阿修羅詣佛所品第三、卷子本一卷。十六紙、一紙縱二十五・八糎、横四十八・二糎、墨界高十九・五糎、幅一・七糎、二十八行、十七字。茶褐麻紙。朱原軸を留めてゐる。尾題は大集經卷第卅四。卷首に淨土寺藏經の單郭黑印（カット、原寸。縱五・七糎、横一・六糎）あり、木刻にして刀法甚だ稚拙である。淨土寺は敦煌鳴沙山の一刹で、この印記をもつ古經は間々存する。また、卷末經題の下に彩色圖像一體（圖高十三・五糎）あり、何佛か不明であるが、所謂忿怒の相はみられぬとしても、三面の示顯は恐らく本經に說く諸阿修羅の一つにして、その手にするものは花か、或は本文にいふ功德水を盛つた眞金の瓶なのであらうか。臺座をふまへ、輕く腰をひねつた姿態も、樣式として敦煌畫には多くみるところ、そして又、遙にかの興福寺阿修羅像に思を馳せしめるものがある。經字、行筆輕快にして流暢ではあるが、些か謹嚴に闕ける憾がある。唐末の筆か。

六　寫經所文書

聖經書寫の淨業は、佛教渡來この方、特に奈良七代七十年（七一〇―七八〇）の間にわたつて公私ともに盛んであつた。官に於てことを司つたのが寫經所で、その制度や規模に何程か隆替變遷はあつたとしても、所謂奈良寫經の名品は、殆どが經所の造經であるといつて過言でない。

イ　經生試字

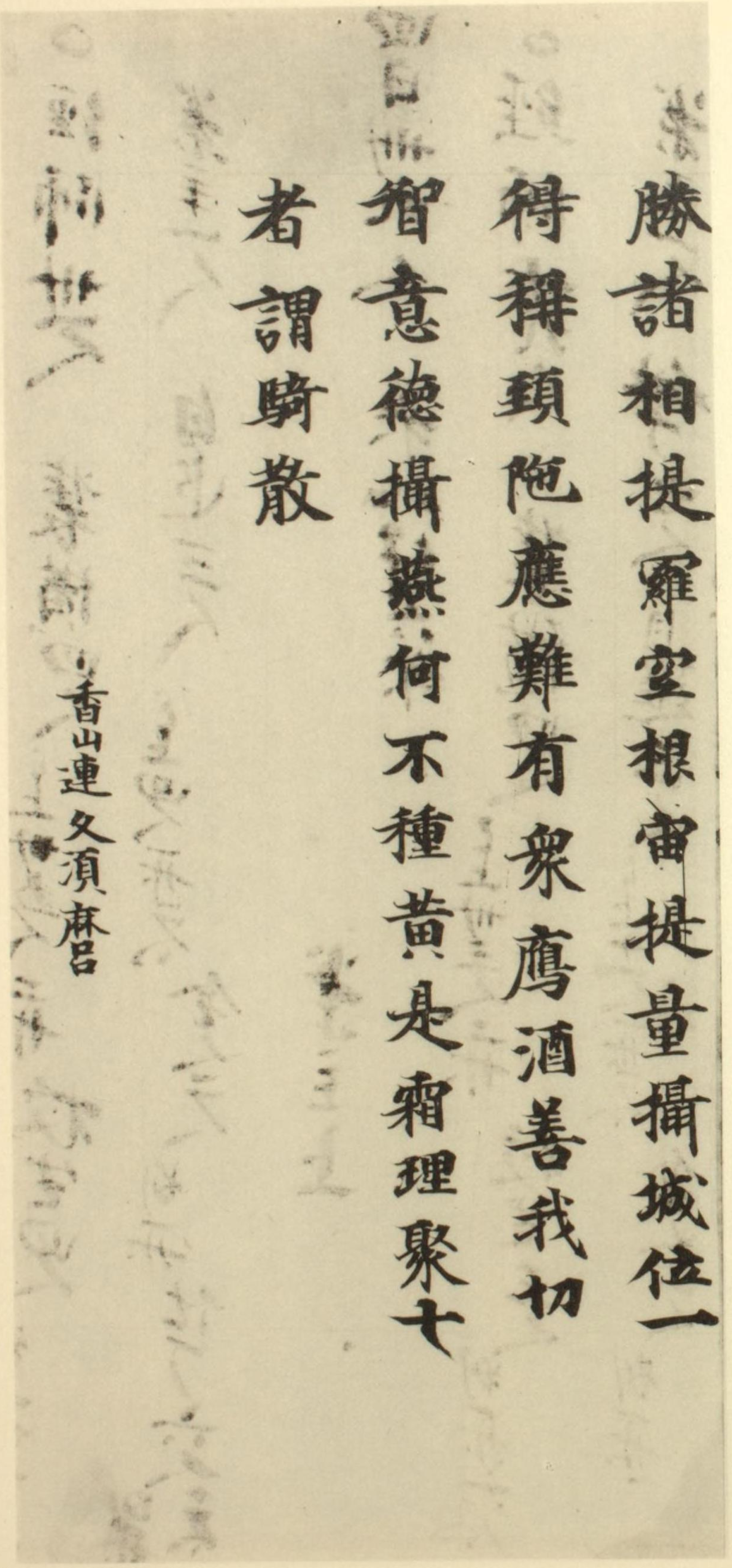
史生中より手蹟を徵して書技を試みる、これを試字といふ。佛典から、時には外典の二三或は數行を寫經料紙の細片に自書せしめ、經生登用の資とするのである。揭出の香山連久須麻呂（Ⅰ）・忍坂和麿（Ⅱ）・長谷部寛萬侶（Ⅲ）・桑原村主安万呂（Ⅳ）は、いづれも正倉院寫經所文書に多くみえ、後年、經生として活躍した人達であつた。安萬呂の三元云々は正月慶賀の文範で、二月分は僅か數字で以下を省くが、書翰文を以て試に應じた例は知らない。もと横山由淸の舊物で、その著尙古圖錄に舊山科元餘所藏、記其皮紙云、紙背原有天平十九年造一切經所之文矣、則本書之舊可見也とある。一般に試字は經所に保管、故紙として適宜他用に供せられることもあり、安萬呂試字について、上引の紙背云々とはこの謂で、揭上の諸例、いづれも紙背に經所食口解文書を持つものである。

ロ　經師手實

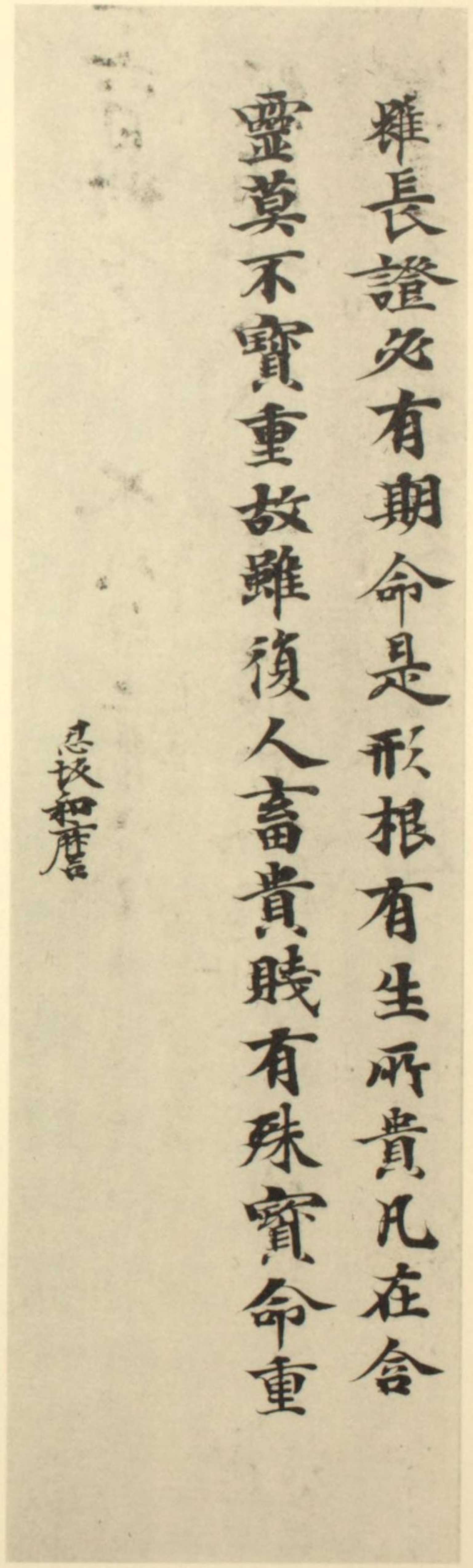
經師が寫經の出來高を官に申告した手簿をその手實といふ。寫經所の故紙に自書提出するのであるが、經所に於てはこれを貼り繼いで卷子に仕立て、案として籤を附して保管する。揭出は、天平二十年五月二十日、錦部君麻呂のもの、紀年上の了字は認承の證である。經師錦部君麻呂の名は天平十一年から勝寶二年の間の文書にみえるが、本手實を同人書寫の經典に比べるとき、その様式化された寫經書體と日常使用文字との差異を知ることができる。

ハ　經所食口解案

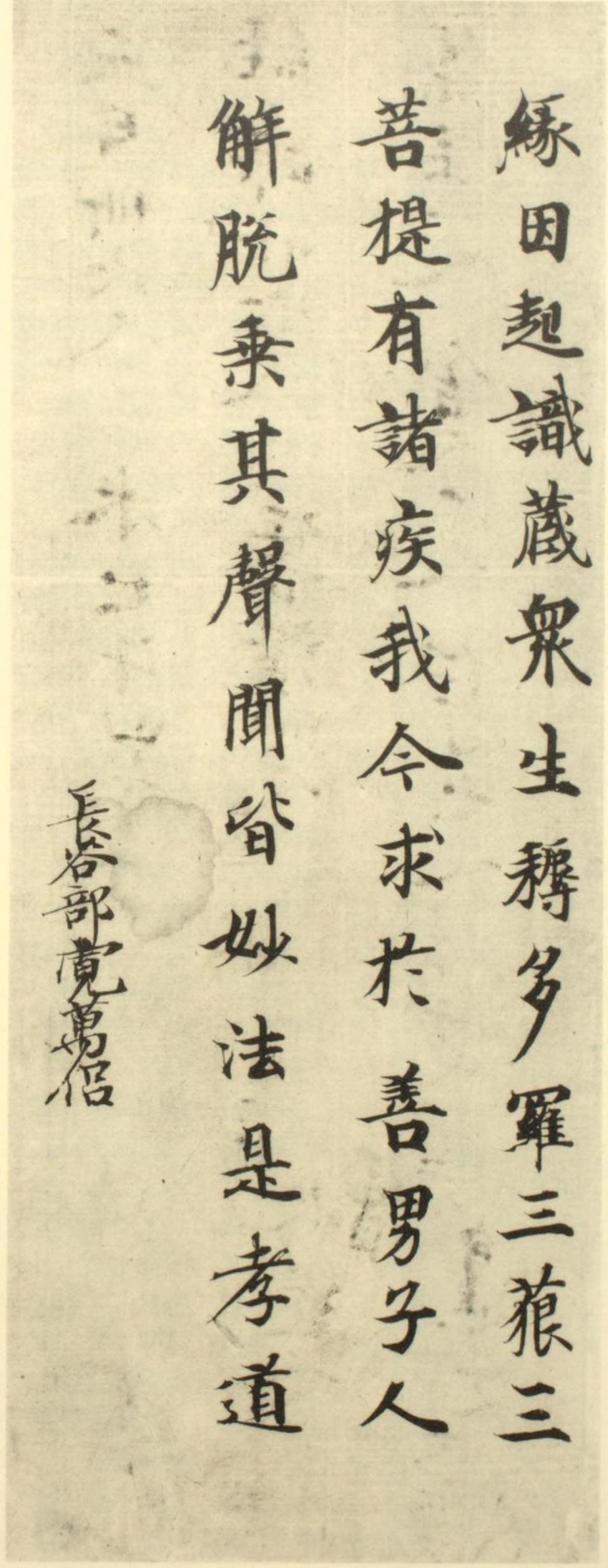
寫經所勤務日々上番の報告簿。揭出の條中央は、寶龜三年七月九日、案主上（アンヌ）（馬養）上申のもの。この日の出仕總計四十九人、給米八斗四升四合。うち、經師二十七人、裝潢四人、校生五人、以上は直接造經の技に携り、給米は經師と裝潢師が同量二升、校生は各八合とある。うち、別に案主一人・自進三人・仕丁七人・舍人二人があり、庶務雜用に使役して、案主はその長。日により多少の增減はあるが、當時經所の構成は概ね推察し得られよう。



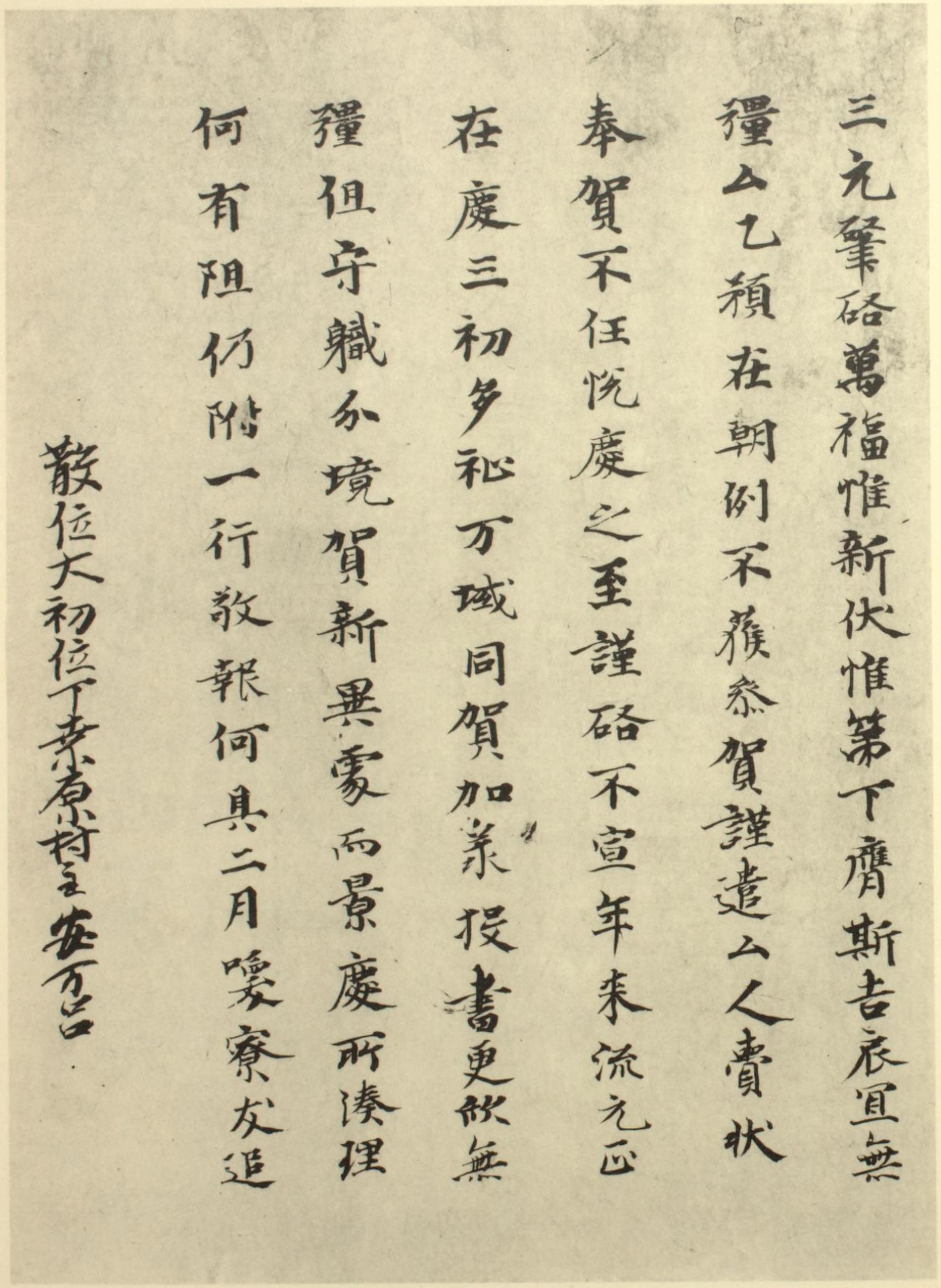
（イの1）


雖長證必有期命是形根有生所貴凡在含
靈莫不寶重故雖復人畜貴賤有殊寶命重
忍坂和麿

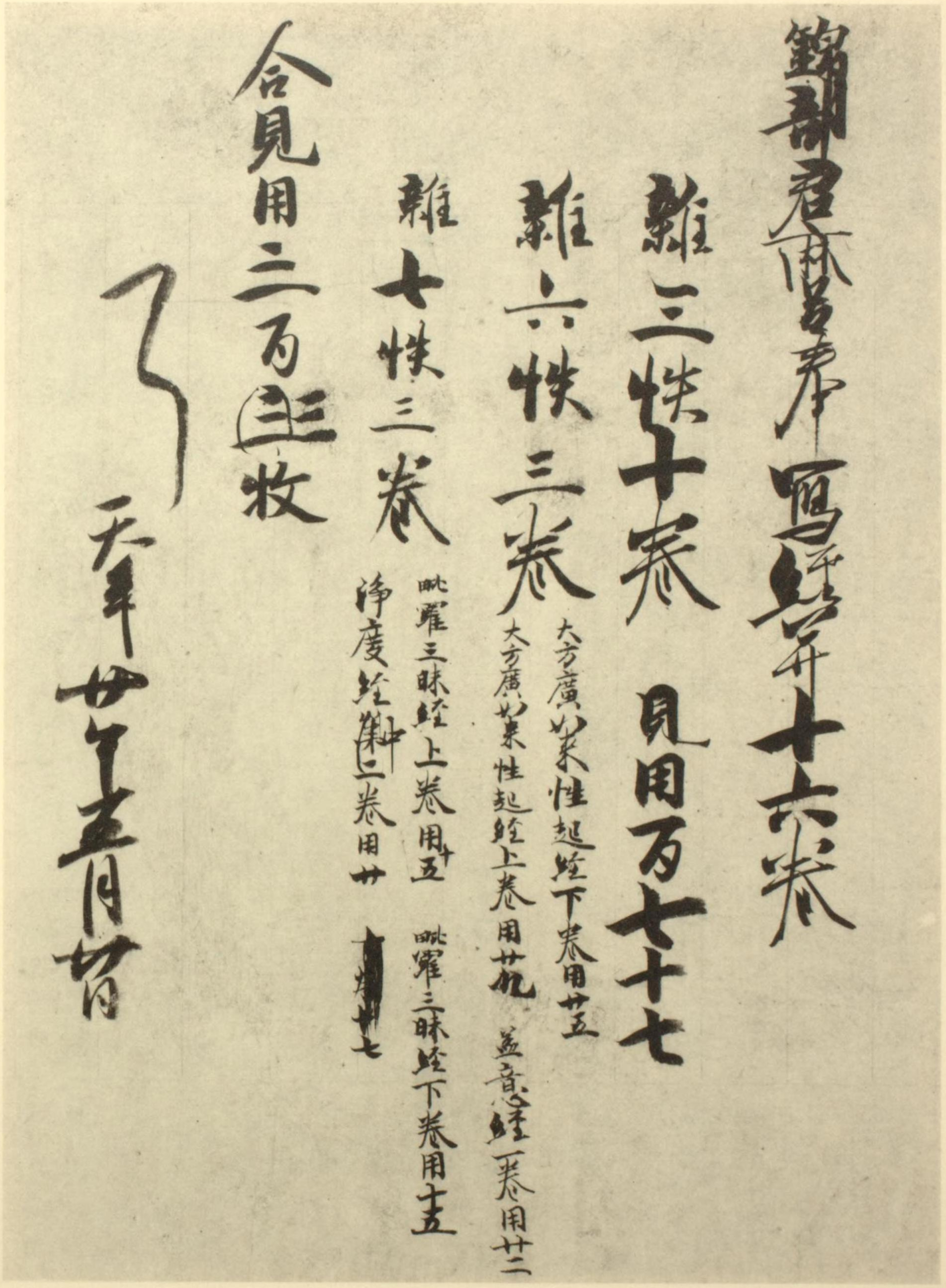
（イのⅡ）


緣田趣識藏衆生稱多羅三藐三
菩提有諸疾我今求於善男子人
解脫乗其聲聞皆妙法是孝道
長谷部寬萬呂

（イのⅢ）


三元肇啓萬福惟新伏惟第下膺斯吉辰宜無
疆ム乙頼在朝例不獲参賀謹遣ム人賷状
奉賀不任悦慶之至謹啓不宣年来流元正
在慶三初多祉万域同賀加兼授書更欲無
疆但守職分境賀新異處而景慶所湊理
何有阻仍附一行敬報何具二月喓寮友追
散位大初位下京原村主安万呂

（イのⅣ）



錦部君麻呂奉写経并十六巻

雑三帙十巻　見用万七十七

大方廣如来性起経下巻用廿五

大方廣如来性起経上巻用廿九　益意経一巻用廿二

雑六帙三巻

雑七帙三巻

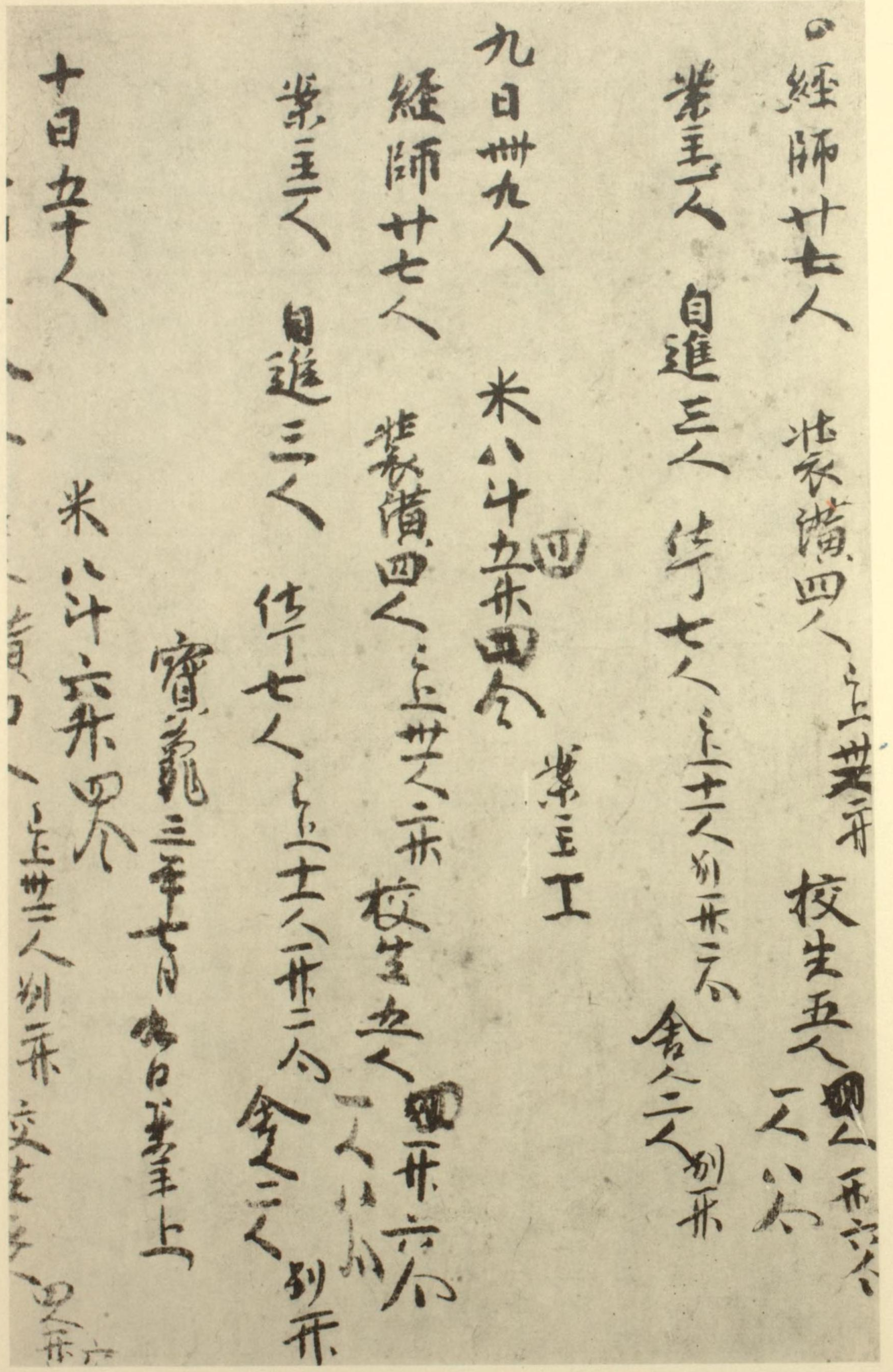
毗羅三昧経上巻用十五　毗羅三昧経下巻用十五

浄度経斛二巻用卅

合見用三万三枚

了

天平廿年五月廿日



一経師廿七人　装潢四人　上廿三并　校生五人

案主一人　自進三人　仕丁七人　上十三人別一升二合　舍人二人別升

九日卅九人　米八斗五升四合　案主工

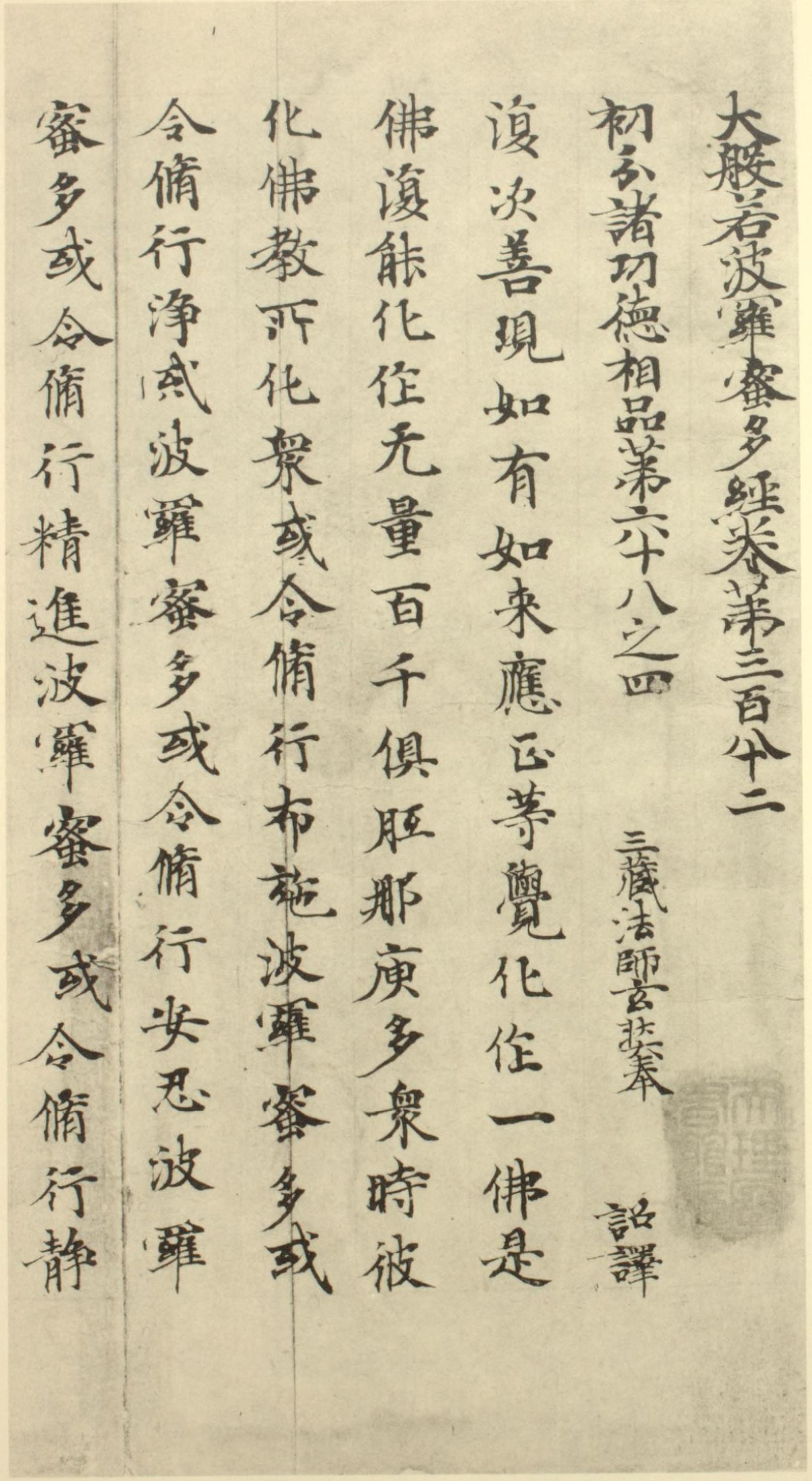
経師廿七人　装潢四人　上卅三人六升　校生五人　一升六合

案主一人　自進三人　仕丁七人　上十三人一升二合　舍人二人別升

寶龜三年七月廿日案主上

十日五十人　米八斗六升四合

[illegible]上卅三人別一升

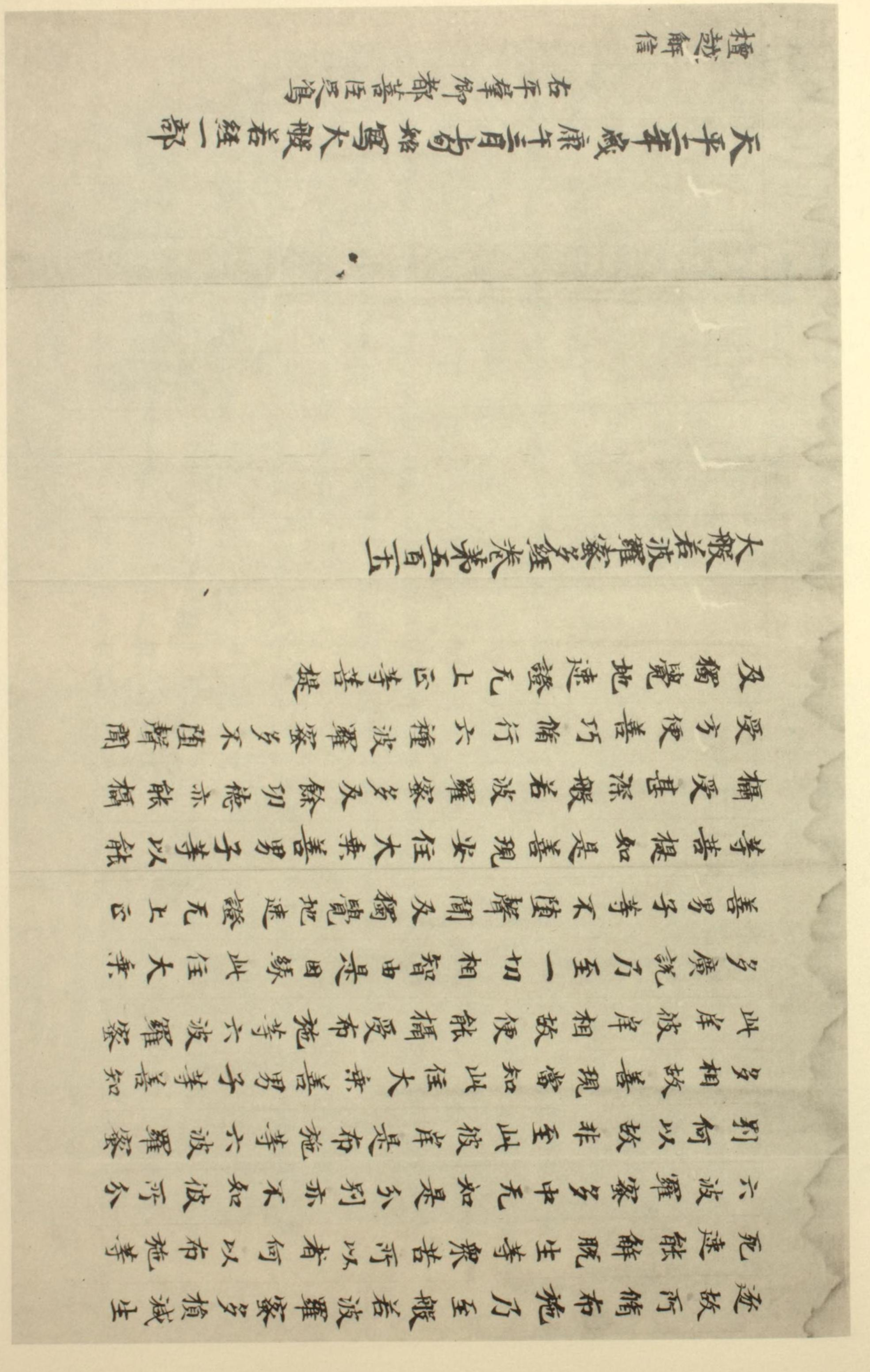

大般若波羅蜜多經卷第三百八十二
初分諸功徳相品第六十八之四　三藏法師玄奘奉　詔譯
復次善現如有如來應正等覺化作一佛是
佛復能化作无量百千倶胝那庾多衆時彼
化佛教所化衆或令脩行布施波羅蜜多或
令脩行淨戒波羅蜜多或令脩行安忍波羅
蜜多或令脩行精進波羅蜜多或令脩行靜

七　大般若波羅蜜多經

養老經。唐三藏法師玄奘譯。一部六百巻。掲出は巻第三百八十二、原巻子本、現改装折本一帖。二十三紙、天裁斷、一紙縱二十四糎、横五十六糎、墨界高十九・四糎、幅一・八糎、三十行、十七字。茶褐穀紙。

奥書　維養老五年歳次

そもそも本經は佛典中最も浩瀚なるが故に、例へば續日本紀聖武天皇天平九年丁丑三月三日の詔に、毎國令造釋迦佛像一軀、挾侍菩薩二軀、兼寫大般若經一部、とあるやうに、一切經の代りに、一具經として發願書寫され、古寫經中遺品は最も多い。本巻も一切經ではなく、一部一具のものであらうが、奥書の書式稍々不備で異常の感あり、且つ現存唯一の僚巻とみられる京都知恩院藏巻第三百八十三の奥書も、同じく養老五年歳次辛酉とあるばかりである。養老五年（七二一）は元正天皇七年、書寫は和銅五年（七一二）の長屋王願經に次いで古く、箱書に和銅經の補經かとある。巻首に徹定弥藏の朱印記あり、かの古經題跋の著者知恩院鵜飼氏の舊儲だつたことが知られる。運筆簡古にして、筆鋒鋭く、未だ必ずしも型に固定せぬ初期寫經の一つの姿を示すものと考へられる。



大般若波羅蜜多經卷第五百十一

天平二年歳次庚午三月上旬始寫大般若經一部

右平群郷都善臣足嶋

檀越解信

八　大般若波羅蜜多經

興福寺永恩具經。掲出は巻第五百十一、原巻子本、現改装折本一帖。十八紙、一紙縦二十五・一糎、横四十九・三糎、墨界高一九・六糎、幅一・六糎、三十行、十七字。茶穀紙。

奥書　天平二年歳康(ママ)午三月上旬、始寫大般若經一部／右平群郷都善臣足嶋／檀越解信

僚卷の奥書願文により、知識經であることが知られるが、右奥書にみえる都善臣足嶋は書寫筆生、解信は供養結縁の檀那である。識跋に貞永二年癸巳正月十九日(中略)永恩年六十七と朱書あり、貞永二年（一二三三）奈良興福寺藏司永恩が、奈良朝や平安朝初期書寫の大般若經を蒐め、朱點を施し、一具經として氏神河内國玉祖神社に奉納したもの。古經題跋に河州高安薗光寺藏とみえ、寺傳によれば南都興福寺の舊藏といふ。後、續古經題跋には狩谷棭齋藏との著錄があつて、更に横山由清の有に歸してその尙古圖錄に摸刻せられ、近來竹柏園文庫に移り、流轉の相は餘りにも如實である。本經書寫の地平群郷は大和國で、勿論經所造寫のものではないが、字相遒勁、初期天平寫經の一典型ともいへよう。

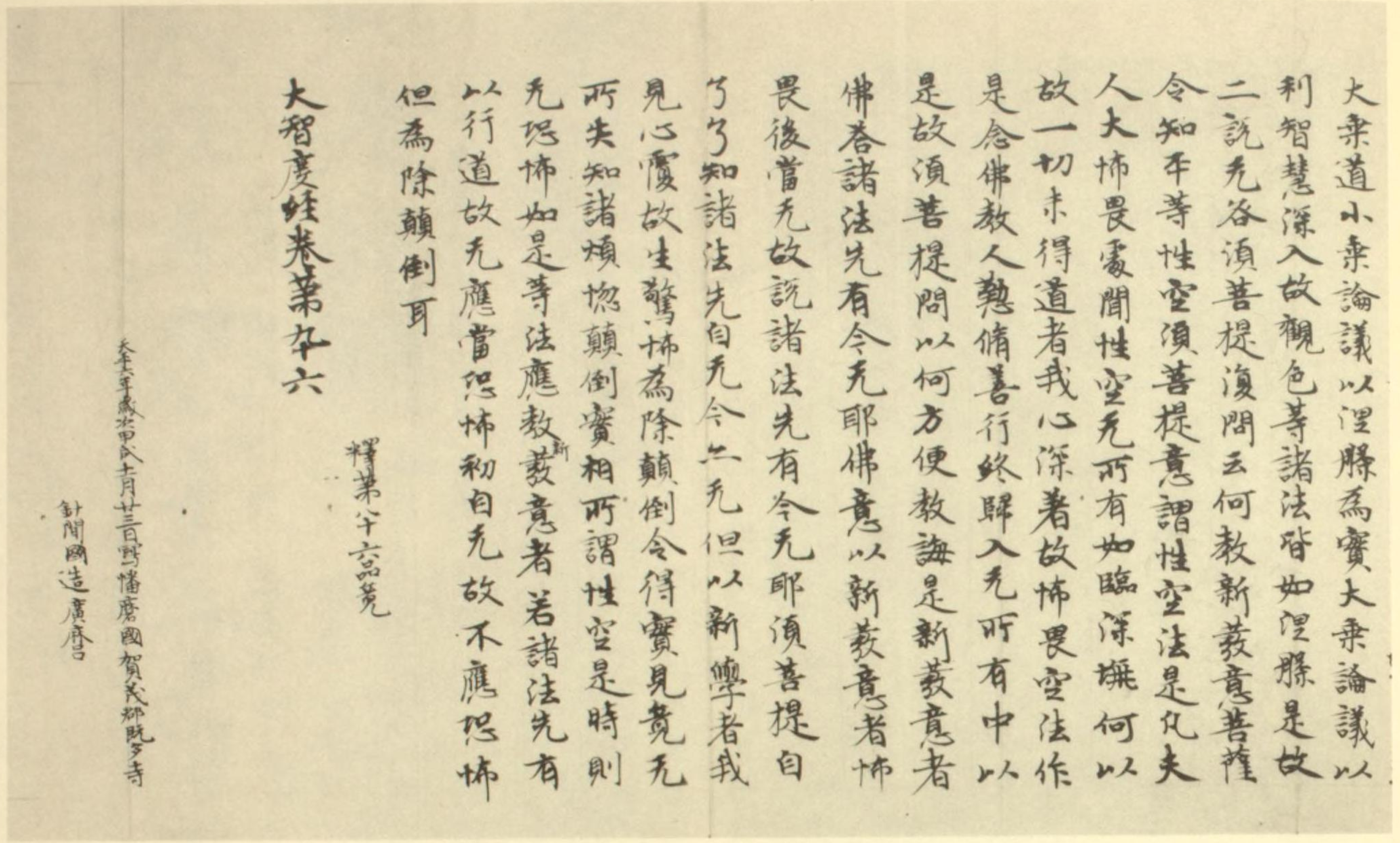
九　大智度論

既多寺知識經。掲出巻第九十六は原巻子本、現改装折本一帖。十八紙、一紙縦二三・八糎、横五七・五糎、墨界高二十糎、幅一・七糎、三十四行、十七字。黄穀紙。巻第九十七は巻子本一巻。十八紙。

奥書　天平六年歳次甲戌十一月廿三日寫、播磨（ママ）國賀茂郡既多寺／針間國造廣麻呂（巻第九十六）

天平六年歳次甲戌十一月廿三日寫、播磨國賀茂郡既多寺／民直次甲（巻第九十七）

播磨國既多寺に於て、大智度論一部百巻を知識経として發願寫成したもので、國造廣麻呂・民直次甲はその知識につき、結縁につながる諸檀那のうちである。既多寺経は他にも遺例があり、各巻末に名を署した人達は、いづれこの地の豪族であつただらう。掲出の兩巻は共に同筆、中央での所謂寫経所風な都雅端麗さは持たぬとしても、地方経生の示す自由輕妙の運筆に、又一種の風趣をみのがすことはできない。



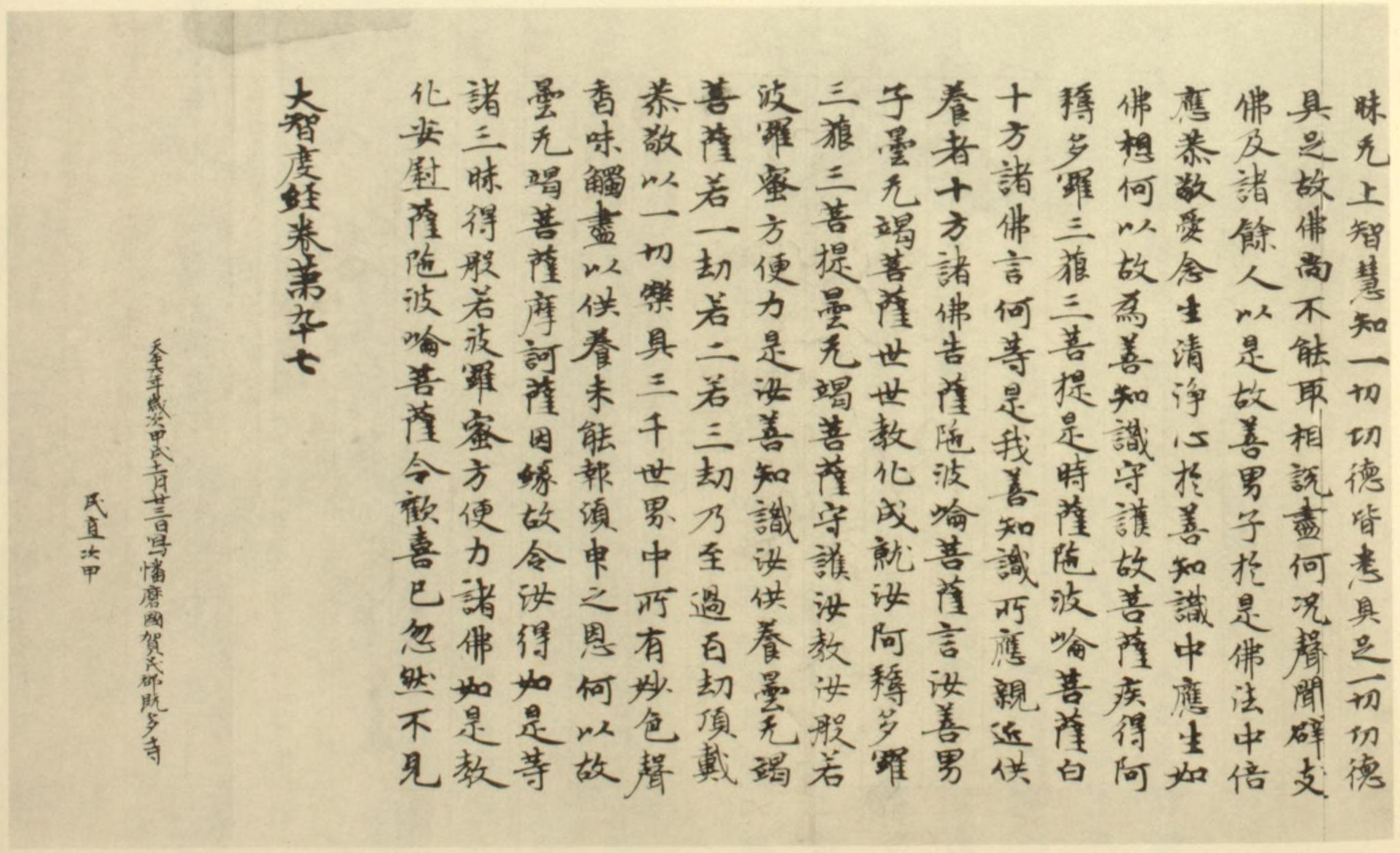
大乘道小乘論議以涅槃爲實大乘論議以
利智慧深入故觀色等諸法皆如涅槃是故
二說无各須菩提復問云何教新發意菩薩
令知平等性空須菩提意謂性空法是凡夫
人大怖畏處聞性空无所有如臨深坑何以
故一切亦得道者我心深著故怖畏空法作
是念佛教人懃脩善行終歸入无所有中以
是故須菩提問以何方便教誨是新發意者
佛答諸法先有今无耶佛意以新發意者怖
畏後當无故說諸法先有今无耶須菩提白
乃乃知諸法先自无今亦无但以新學者我
見心覆故生驚怖爲除顛倒令得實見覺无
所失知諸煩惱顛倒實相所謂性空是時則
无恐怖如是等法應教新發意者若諸法先有
以行道故无應當恐怖初自无故不應恐怖
但爲除顛倒耳

釋第八十六品竟

大智度經卷第九十六

天平六年歳次甲戌十一月廿三日寫播磨國賀茂郡既多寺

針間國造廣麻呂

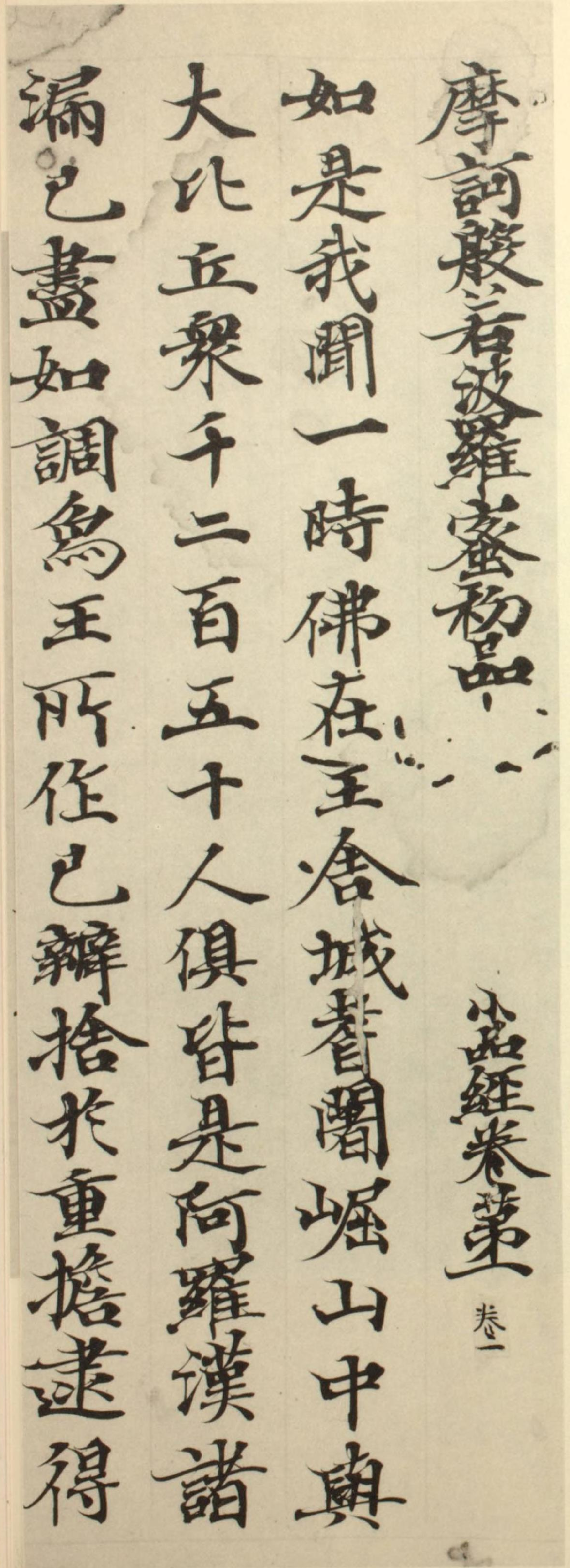


昧无上智慧知一切功德皆悉具足一切功德
具足故佛尚不能取相說盡何況聲聞辟支
佛及諸餘人以是故善男子於是佛法中倍
應恭敬愛念生清淨心於善知識中應生如
佛想何以故爲善知識守護故菩薩疾得阿
耨多羅三藐三菩提是時薩陀波崘菩薩白
十方諸佛言何等是我善知識所應親近供
養者十方諸佛告薩陀波崘菩薩言汝善男
子曇无竭菩薩世世教化成就汝阿耨多羅
三藐三菩提曇无竭菩薩守護汝教汝般若
波羅蜜方便力是汝善知識汝供養曇无竭
菩薩若一劫若二若三劫乃至過百劫頂戴
恭敬以一切樂具三千世界中所有妙色聲
香味觸盡以供養未能報須臾之恩何以故
曇无竭菩薩摩訶薩因緣故令汝得如是等
諸三昧得般若波羅蜜方便力諸佛如是教
化安慰薩陀波崘菩薩令歡喜已忽然不見

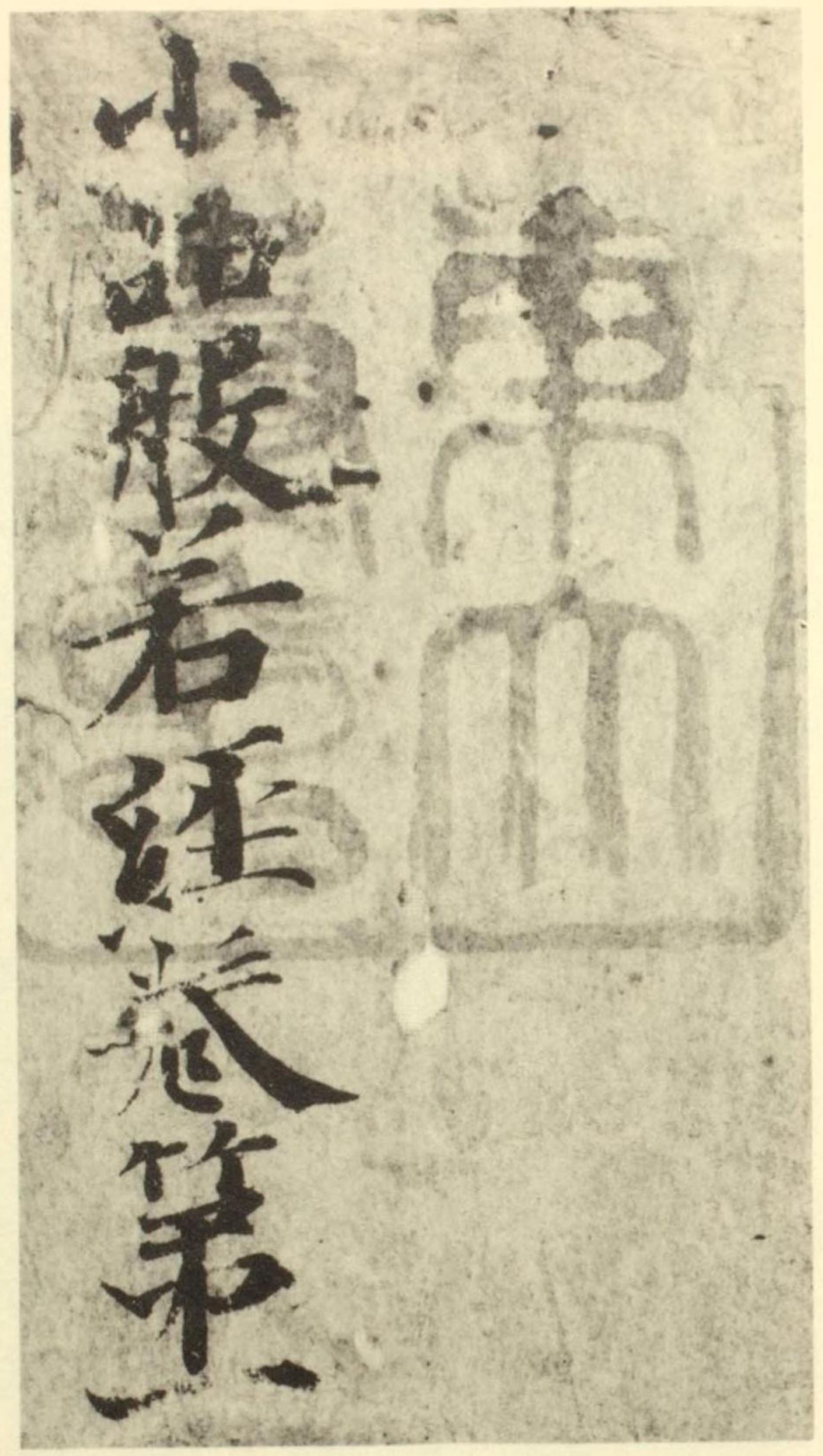
大智度經卷第九十七

天平六年歳次甲戌十一月廿三日寫播磨國賀茂郡既多寺

民直次甲



10-1



10 小品般若經

光明皇后願經。姚秦鳩摩羅什譯。一部十巻。揭出は巻第一、巻子本一巻。十一紙、一紙縦二六・三糎、横四十四糎、墨界高十九・六糎、幅一・八糎（巻初寫眞、文字原寸）、二十四行、十七字。黄蔴紙。

奥書　皇后藤原氏光明子、奉爲　／尊考贈正一位太政太臣府君尊妣／贈從一位橘氏太夫人、敬寫一切經論及／律、莊嚴既了、伏願、憑斯勝因、奉資／冥助、永庇菩提之樹、長遊般若之律／又願、上奉　聖朝恒延福壽、下及／寮采共盡忠節、又光明子自發誓／言、弘濟沈淪、勤除煩障、妙窮諸法、早／契菩提、乃至傳燈無窮、流布天下／聞名持巻、獲福消災、一切迷方、會／歸覺路／天平十二年五月一日記

天平十二年（七四〇）聖武天皇妃光明皇后が、亡親藤原不比等・橘夫人三千代への孝養、聖朝萬歳等を祈念發願して書寫せしめられた一切經は、願文紀年によつて五月一日經ともよばれる。用紙美麗、書體典雅に、筆勢纖細方正、願文雄渾、天平寫經の優秀さを代表して餘すところがない。うち本巻は、黄蔴紙表紙の原形を殘存し、その經題に小品般若經巻第一とあつて東大寺印の單郭朱印（寫眞、原寸大。縦五・八糎、横五・九糎）を捺し、同印記は更に尾題上にもあつて、最も完好の姿を留めてゐる。經題は本文とは別に經生中殊に老練の名手が專らこれにあたるものであるが、巻末願文も亦本文とは筆意を異にする。揭出本は具經巻第二の所在も知られて、共に同筆、光明皇后願經中での尤品といへる。（重美）

生樂說亦无生如是樂說舍利弗言善哉善
哉須菩提汝於說法人中為最第一何以故
須菩提隨所問皆能答故須菩提言法應尒
諸佛弟子於无依止法所問能答何以故一
切法无㝵故舍利弗言善哉善哉是何波羅
蜜力須菩提言是般若波羅蜜力舍利弗若
菩薩聞如是說如是論時不疑不悔不難當
知是菩薩行是行不離是念舍利弗言若菩
薩不離是行不離是念一切衆生亦不離是
行不離是念一切衆生亦當是菩薩何以故
一切衆生不離是念故須菩提言善哉舍利
弗汝欲難我而成我義何以故衆生无性故
當知念亦无性衆生離故念亦離衆生不可
得故念亦不可得舍利弗我欲令菩薩以是
念行般若波羅蜜

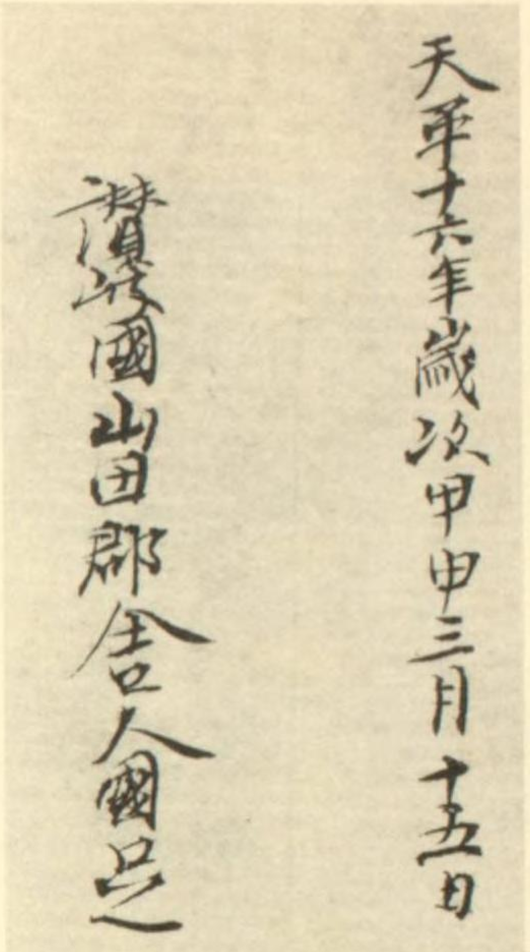
小品般若經卷第一

小品般若波羅蜜經卷第一

皇后藤原氏光明子奉為
尊考贈正一位太政太臣府君尊妣贈
從一位橘氏太夫人敬寫一切經論及
律莊嚴既了伏願憑斯勝因奉資
冥助永庇菩提之樹長遊般若之津
又願上奉　聖朝恒延福壽下及
寮采共盡忠節又光明子自發誓
言弘濟沉淪勤除煩障妙窮諸法早
契菩提乃至傳燈無窮流布天下
聞名持卷獲福消災一切迷方會
歸覺路

天平十二年五月一日記

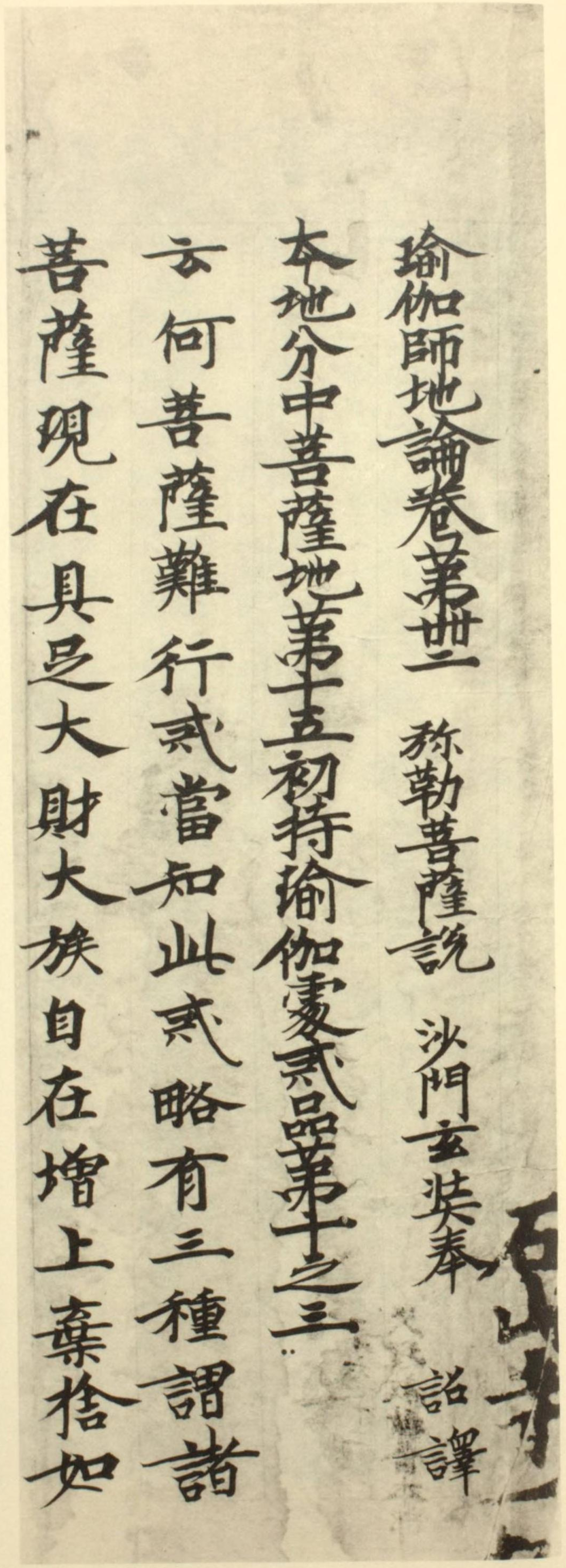
二　瑜迦師地論

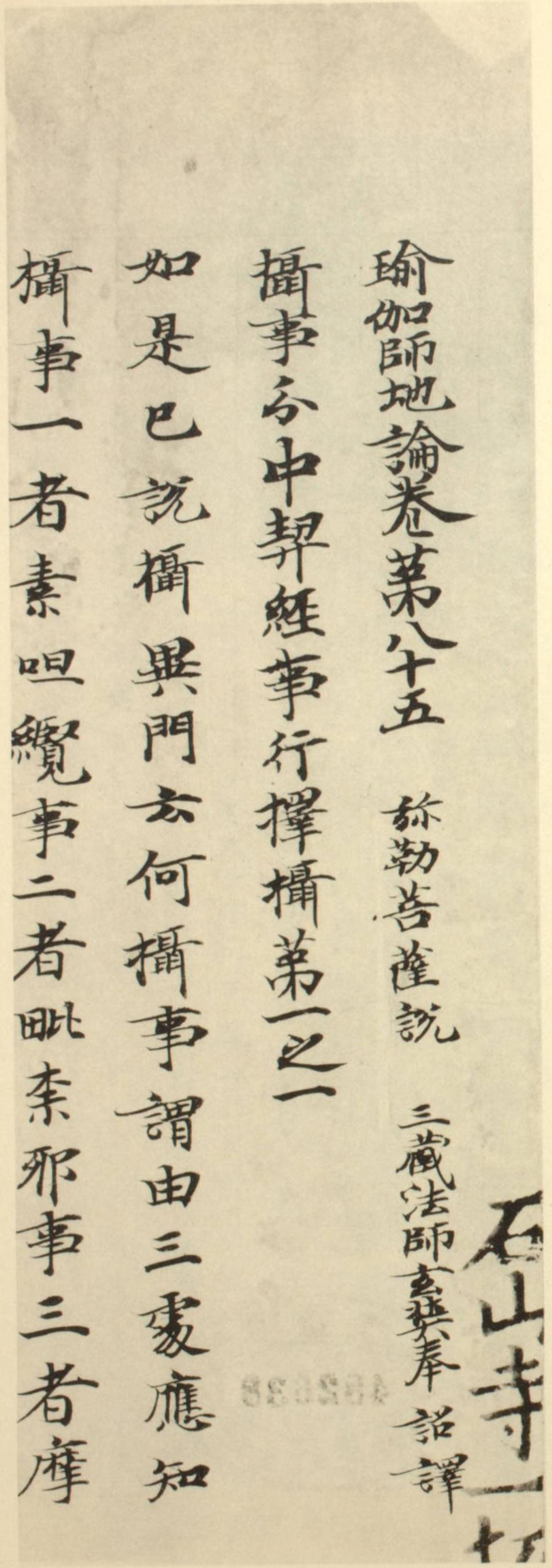

天平十六年歳次甲申三月十五日
讃岐國山田郡舎人國足

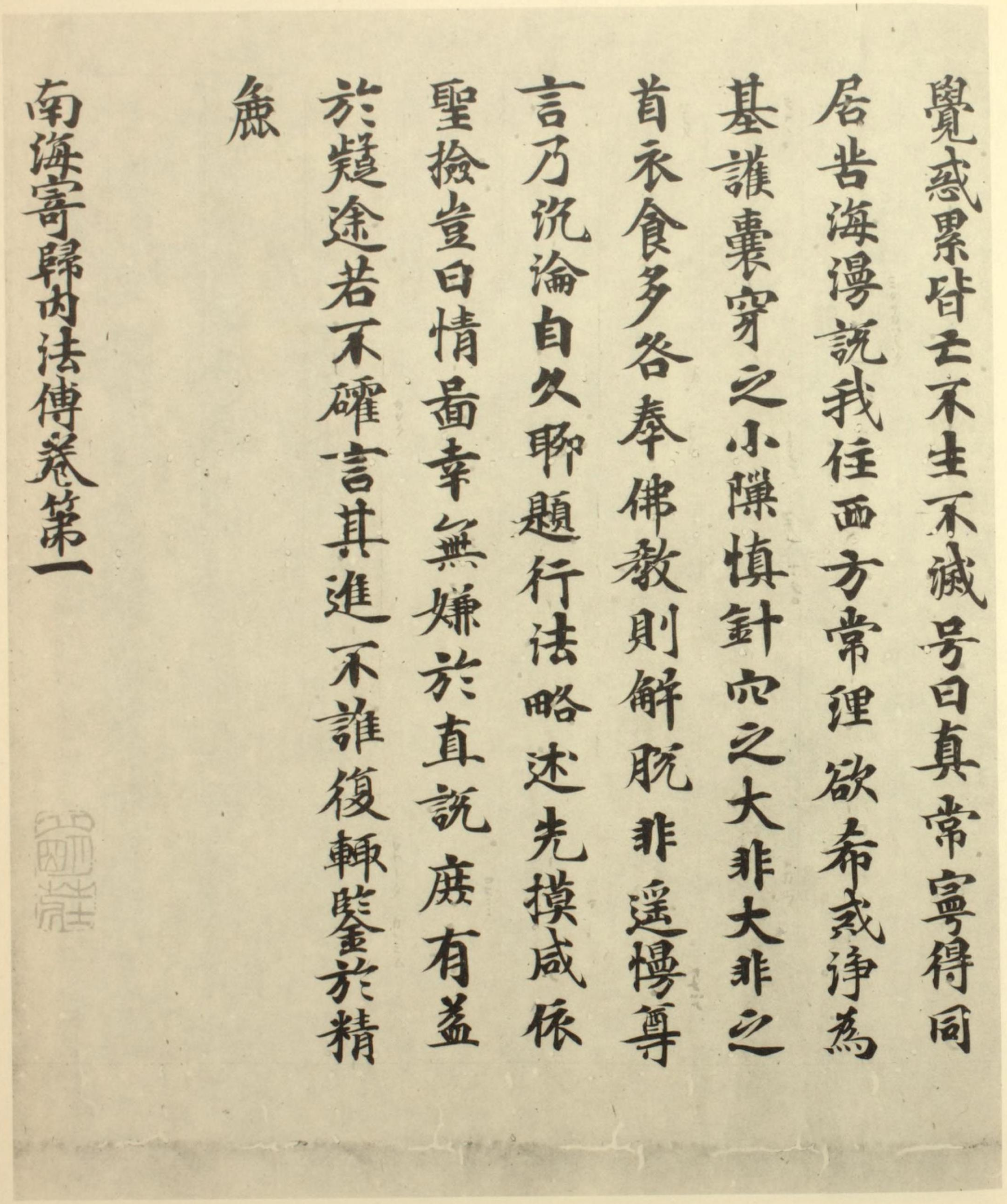
彌勒菩薩說、玄奘譯。一部百卷。法相宗所依の經典として、奈良佛教では甚だ尊重されたもので、遺品も亦乏しくない。掲出卷第四十二は卷子本一卷。十六紙、天地裁斷、一紙縱二十三・八糎、橫五十六・八糎、墨界高十九・一糎、三十行、十七字。黃穀紙。卷第八十五は十七紙。

奧書　天平十六年歲次甲申三月十五日／讃岐國山田郡舍人國足（兩卷同文、カットは卷第四十二による）

紙背に元興寺印の重郭朱印（徑二・九糎）二顆があり、もと奈良元興寺にあつたことが知られ、後、石山寺に移り、その一切經中に加へられたことは、卷首の石山寺一切經なる黑印記によつて明らかである。個人願經ではなく多くの願主による知識經であり、又、一切經ではなくて一部百卷の一具經として、四國讃岐地方での造經といふことであらうか。掲出の兩卷はもとより一具の僚卷であるが、彼此別筆、思ふに、一部百卷については數手によつて寫成されたものであつて、卷第四十二は書風稍々偏平散漫、到底田舍經たるのそしりをまぬがれぬ。


瑜伽師地論卷第卌二　弥勒菩薩說　沙門玄奘奉　詔譯
本地分中菩薩地第十五初持瑜伽處戒品第十之三
云何菩薩難行戒當知此戒略有三種謂諸
菩薩現在具足大財大族自在增上棄捨如


瑜伽師地論卷第八十五　弥勒菩薩說　三藏法師玄奘奉　詔譯
攝事分中契經事行擇攝第一之一
如是已說攝異門云何攝事謂由三處應知
攝事一者素怛纜事二者毗柰耶事三者摩



覺惑累昔亡不生不滅号曰真常寧得同
居告海漫說我任西方常理欲希或淨為
基護囊穿之小隙慎針穴之大非大非之
首衣食多咎奉佛教則解脫非遥慢尊
言乃沉淪自久聊題行法略述先模咸依
聖撿豈曰情畜幸無嫌於直說庶有益
於疑途若不確言其進不誰復輙鑒於精
麁

南海寄歸內法傳卷第一

三　南海寄歸內法傳

唐義淨撰。一部四卷。別に大唐南海寄歸舊傳等ともいふ。唐咸亨二年（六七一）三十七歳にして海路渡天、三十餘年間にわたり親しく見聞した印度や南海諸國に於ける比丘・比丘尼の日常生活を記述したもので、武后天授二年（六九一）に成る。揭出卷第一は卷子本。卷首闕、存十七紙、天地裁斷、一紙縱二十六・一糎、橫五十七糎、墨界高二十一・七糎、幅二・二糎、二十六行、十七字。黃麻紙。卷第二は十八紙、縱二十六・四糎。揭上の兩本は具經の僚卷で且つ同筆。書法重厚精妙にして雅正、前後寫經中での優蹟といへよう。守屋孝藏本に卷第四殘簡あり、如上の兩卷とは異筆とみられる。本卷恐らく經所に於ける造經であらうが、現存の諸卷ともに奧跋なく、寫成の年次は不詳である。正倉院文書寫經請本帳天平十一年七月十二日の條額田部萬呂の受文七卷とある中に南海寄歸舊傳四卷とみへ、川原堅魚天平勝寶六年二月二十三日には、請大唐南海寄歸內法傳四卷とあり、この期に幾度か本經が書寫されたことも確かであるが、揭上の兩卷、その運筆のはしばしに、殊に波磔のあたり些か柔軟和臭の氣味あり、或は平安朝初期かとも考へられる。もと石山寺一切經中のものであつた。（國寶）

法　内法傳卷第二

沙門義

十衣食所須　十一著

十二尼衣喪制　十三結

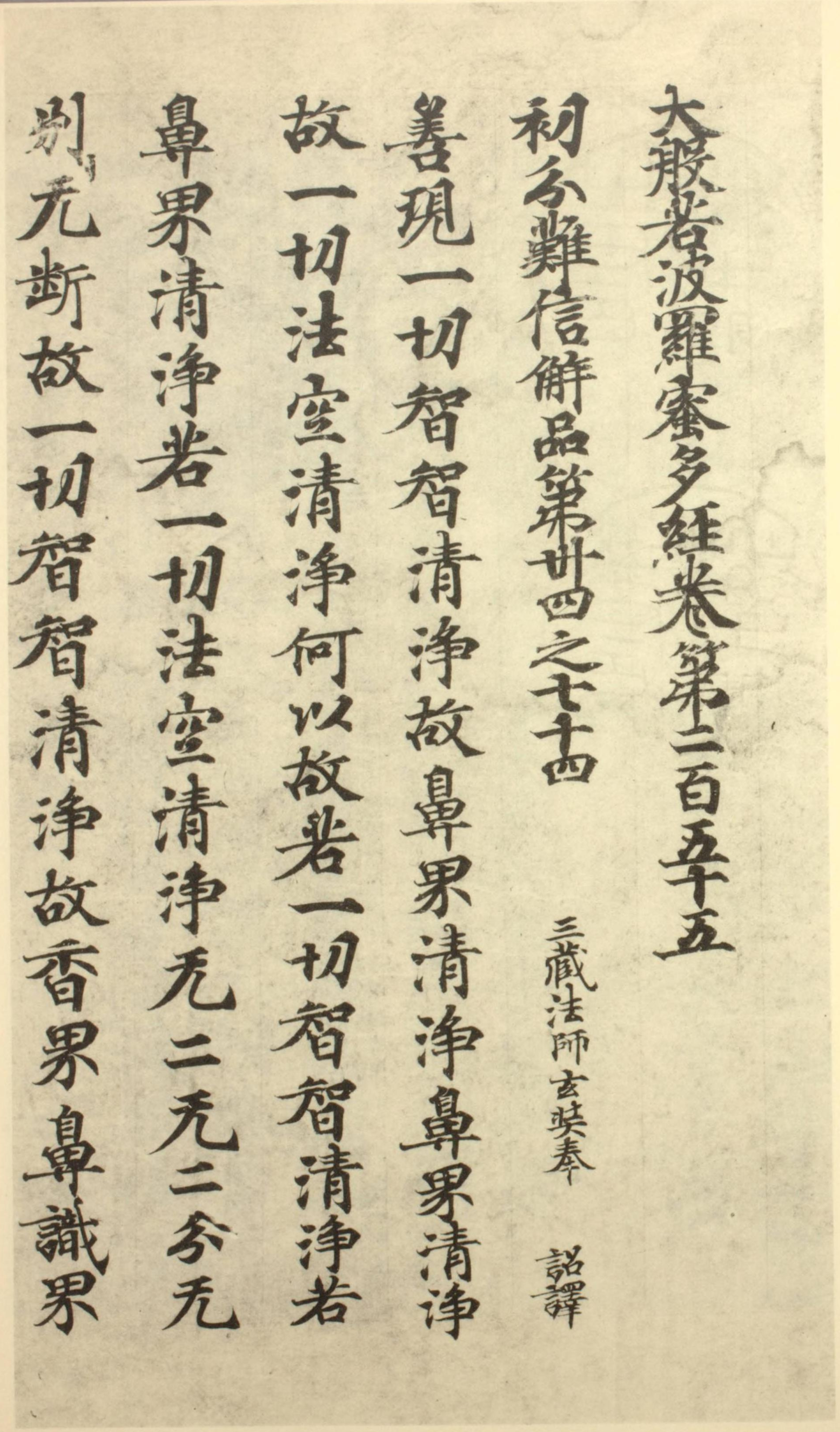
十四五衆安居　十五隨

十六匙筯合否　十七知時

十八便利之事

十衣食所須

察夫有待累形假衣食而始濟無生妙智託
滅理而方興若其受用乖儀便招步步之罪
澄心失軌遂致念念之迷為此於受用中求
脫者順聖言而受用在澄心勵習理者符先
教以澄心即須俯視生涯是迷生之牢獄仰
睎寂岸為悟之虛關方可職法舟於苦津秉
慧炬於長夜矣然於所著衣服之製飲食
之儀若持犯暉然律有成則初學之輩亦識
重輕此則得失局在別人固乃無煩商推自
有現違律檢而將為指南或可習俗生常謂
其無過或道佛生西國彼出家者依西國之
形儀我住東川離俗者習東川之軌則詎能
移州之雅服受印度之殊風者聊為此徒直


大般若波羅蜜多經卷第二百五十五
初分難信解品第卅四之七十四　三藏法師玄奘奉　詔譯
善現一切智智清淨故鼻界清淨鼻界清淨
故一切法空清淨何以故若一切智智清淨若
鼻界清淨若一切法空清淨无二无二分无
別无斷故一切智智清淨故香界鼻識界

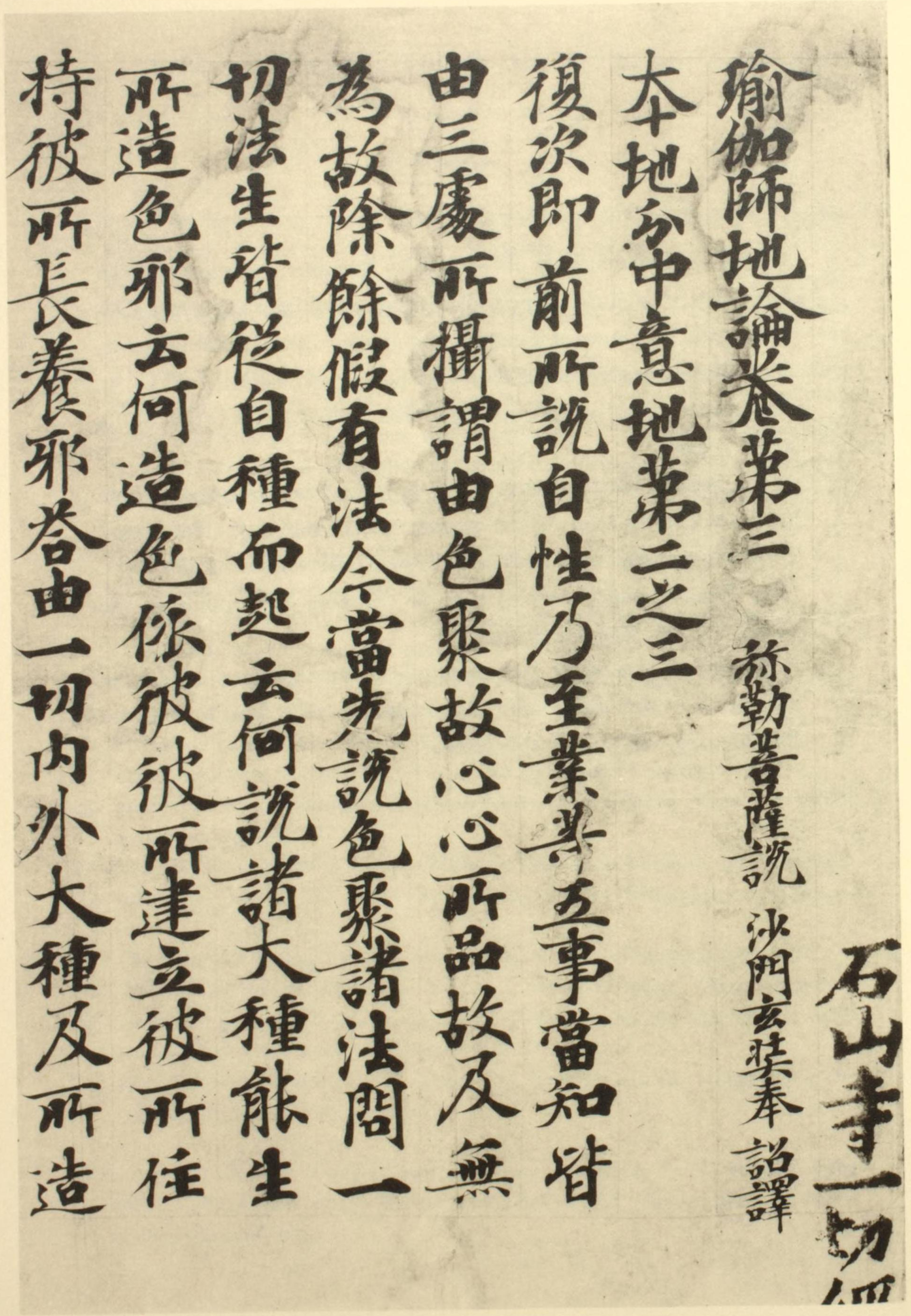
一三　大般若波羅蜜多經

魚養經。掲出は卷第二百五十五、卷子本一卷。一九紙、一紙縱二十七・二糎、横五十七・一糎、墨界高二十三糎、幅二・三糎、二十四行、十七字。黃穀紙。

一部六百卷一具經のうち。朝野魚養筆と傳稱され、その故に魚養經とよばれてゐる。もと元興寺十輪院に所傳し、元興寺印の丸朱印二顆を有するが、後、藥師寺にうつつた。表紙經題及び卷初大題上に重郭朱丸印藥師寺印（徑五・二糎）を捺し、卷首紙背に藥師寺金堂の長方黑印（カット、原寸。字高七・三糎）あり、これによつて又別に藥師寺經ともよぶ。

魚養は忍海原連、奈良朝末平安朝初期の人。等しく藥師寺魚養經といはれるものにも、少なからず異筆を含み、凡て一手に出たといふべきものでない。いづれにしても魚養筆たる確證はみられず、書蹟或は神護景雲二年（七六八）孝謙天皇勅願一切經に比すべきかといふ。所謂魚養經のうち、本卷は茶褐の原表紙に、卷軸は白蜜陀漆を施した撥形原軸を留め、完好の原姿を保つて、字相雄大、後期奈良朝寫經を代表するものといつてはばかるところはない。

（重美）


石山寺一切經
瑜伽師地論卷第三　弥勒菩薩説　沙門玄奘奉　詔譯
本地分中意地第二之三
復次即前所説自性乃至業異五事當知皆
由三處所攝謂由色聚故心心所品故及無
為故除餘假有法今當先説色聚諸法問一
切法生皆從自種而起云何説諸大種能生
所造色耶云何造色依彼彼所建立彼所任
持彼所長養耶答由一切内外大種及所造

一四　瑜伽師地論

穴太乙麻呂願經。掲出のものはその巻第三、巻子本一巻。十四紙、天地裁断、一紙縦二十三・九糎、横五十四・五糎、墨界高二十一糎、幅一・八糎、二十九行、十七字、茶褐穀紙。

奥書　寶龜拾年歳次己未三月廿五日／願主穴太乙麻呂

寶龜十年（七七九）は光仁天皇御宇。石山寺一切經中のもので、本巻に同文の奥書を有する館藏巻第七・八に比較するに、共に同筆であるが、他に書風を異にする僚巻もあつて、敷筆による一具寫經とみるべきである。筆致闊達にして大字、著しく右上りで個性強く、巧妙ではあるが弄筆の技に過ぎ、或種の匠氣を否定し得ない。奈良末期寫經の一つの傾向を示すものといふべきであらう。

TENRI CENTRAL LIBRARY PHOTO-SERIES, No. 25

Old Buddhist Manuscripts

Contents

1. Image of *San-ts'ang fa-shih Hsüan-chuang* fetching the Buddhist sutras. 8th century. Found at Tun-huang. Formerly in Langdon Warner Collection.
2. *Ta-chih-tu lun*, Vol. 69, dated with the reign year: Ta-yeh (大業) of the Sui dynasty, 607 A. D.
3. *Wei-mo-ch'i ching*, Vol. II. From Tun-huang, dated the reign year: *Yen-shou* (延壽) of the local dynast of Turfan, 637 A. D.
4. *Pan-jo po-jo-mi-to hsin-ching chu*, annotated. Tun-huang provenance, prior to 1827. Chinese translation of the refrain at the end is most remarkable.
5. *Ta-fang-têng ta-chi-yüeh-ts'ang ching*, Vol. 34, with a coloured image of Bodhisattva Tun-huang *provenance*.
6. Documents from the Sutra-Copying Office.
   (A) Trials for the test of copyists.
   (B) Daily report on the number of sutras completed by each copyist, and total number of sheets of paper used per volume.
   (C) Daily record of the number of employees, including copyists, etc., with the quantity of rice consumed by them. 772 A. D.
7. *Ta-pan-jo po-jo-mi-to ching*, Vol. 382. 721 A. D.
8. The same sutra, Vol. 511. 703, A. D., with signature of copyist.
9. *Ta-chih-tu lun*, Vols. 96, 97. Both dated 734 A. D., with the signatures of the respective copyists.
10. *Hsiao-p'in pan-jo ching*, Vol. 1. With the dedication words of Queen Kōmyō and dated: May 1, 740 A. D. Representing the best calligraphy of Japanese sutras.
11. *Yü-ch'ieh-shih-ti lun*, Vol. 42. An example of local calligraphy, 744 A. D.
12. *Nan-hai chi-kuei nei-fa-ch'uan*, Vol. 1, 2, both incomplete. Dates unknown.
13. *Ta-pan-jo po-jo-mi-to ching*, Vol. 255. Representing the stereotyped calligraphy of the late Nara period, ca. 768 A. D.
14. *Yü-ch'ieh-shih-ti lun*, Vol. III. Dated 779, showing skilled calligraphy in the style of the later Heian period.

Back cover: *Ta-fang kuang-fo hua-yen ching*. ca. 740 A. D. Written in silver paste on dark blue paper; Burned in the fire of 1667; hence called the *Yake-gyō*, or Burned Sutra.

This volume contains old Buddhist manuscripts selected from our collections, numbering fourteen items, which range from Chinese materials found at Tung-Huang and Japanese Buddhist sutras copied exclusively during the Nara period, 8th century A. D., to documents of the Sutra-Copying Office (寫經所, *Shakyōsho*) of the same period.

We believe the last named group will afford the reader some testimony on the study of the organization of copying sutras at that time which must have amounted to nearly astronomical numbers. The Tung-Huang examples may be valuable in pinpointing the origins of the Japanese sutra.

A volume containing later examples from the same categories belonging to the Heian and succeeding periods, dating from the 9th century, will follow this issue.

大方廣佛華嚴經

二月堂焼經。紺紙銀泥。天平中期の作であらうか、寫經體として最も典型的な文字、紺紙經としても奈良寫經中稀有の遺品である。寛文七年（一六六七）修二會の際火災に遭ひ、俗に二月堂焼經、又は單に焼經ともよばれてゐる。銀字は火氣を受けて益々燦然と輝き、所謂銀泥字でないことがわかる。（裏表紙）

昭和四十年十月 十 日　印　刷
昭和四十年十月十八日　發　行

編輯者　奈良縣天理市　天理圖書館
京都市中京區新町通竹屋町南
印刷者　株式會社　便　利　堂
發行者　奈良縣天理市　天理大學出版部

善本寫眞集
TENRI CENTRAL LIBRARY PHOTO SERIES

I　日本近世名家自筆集 (Autographic documents of Edo-period in Japanese literature)　昭和28

II　きりしたん版 (The Jesuit Mission Press in Japan)　昭和28

III　古　俳　書　I (Kohaisho-I : Materials of early Haikai)　昭和29

IV　西洋古版日本地圖集 (Early printed maps and atlases of Japan made in Western countries)　昭和29

V　開館廿五周年記念 稀覯本集 (Collection of old and rare books and manuscripts, the 25th anniversary volume)　昭和30

VI　滿 文 書 籍 集 (Collection of Manchu books)　絶　版

VII　近代作家原稿集 (Collection of Autographic MSS. of Japanese novelists and poets from Meiji-Taishō periods)　昭和31

VIII　小 泉 八 雲 集 (Lafcadio Hearn)　昭和31

IX　日　本　史　籍 (Classics of the History of Japan)　昭和32

X　泰西日本紀集 (Early Western works on Japan)　昭和32

XI　お　伽　草　子 (Otogi-zōshi : Nursery tales of Muromachi-period)　昭和33

XII　獨逸文人自筆集 (Autographs of German literati)　昭和33

XIII　古　俳　書　II (Kohaisho-II : Materials of early Haikai)　昭和34

XIV　百　科　事　典 (Encyclopaedias)　昭和34

XV　開館卅周年記念 善本聚英 (Collection of old and rare books and manuscripts, the 30th anniversary volume)　昭和35

XVI　紀行航海記集 (Collection of Travels & Voyages)　昭和36

XVII　永 井 荷 風 集 (Nagai Kafū)　昭和36

XVIII　インキュナビュラ (Incunabula)　昭和37

IXX　宋　　版 (Sung Editions)　昭和37

XX　地球儀・天球儀 I (Terrestrial and Celestial Globes-I)　昭和38

XXI　曲　亭　馬　琴 (Kyokutei Bakin)　昭和38

XXII　地球儀・天球儀 II (Terrestrial and Celestial Globes-II)　昭和39

XXIII　正　岡　子　規 (Masaoka Shiki)　昭和39

XXIV　聖　　書 (Bible)　昭和40

XXV　古　寫　經 (Old Buddhist Manuscripts)　昭和40

026.
Te147 3
II

佛受生自在
又生如來像ト
相此相現時諸天
見此瑞歡喜シテ
城入此園林中生ト
明因此光故一ワ
所謂寶牙菩ラ
聲讚善生光十方ニ